

少女は空を見上げていた。突き抜けるような透明な空、四方に広がりやがて山脈の描く稜線と交わり地平線の彼方へ消えていく。目に見えるものはそれだけ。視線を下に移せば地面を覆う瓦礫、かつて街を造っていた建物の残骸が目に入る。それらはすべて墓標であり、骨壺であり、死者を葬る墓地である。要するに、きつと、多くの人間があの下に眠っているに違いない。そんな想像、あるいは事実を頭から振り払うようにして、少女はなお空を見上げ続けていた。

世界は一瞬で変遷した。いずれ確実に滅びが訪れるとするならば、五百年の歳月が一瞬で過ぎたといつていいのかもしれない。光陰矢の如し、百代の過客は百発百中で終焉という的を射る。

やがて少女は立ち上がり、歩きはじめる。少女の長く艶やかな黒髪は砂埃にまみれ、その輝きを失っている。着ているシャツも同じく薄汚れ何ヶ所も擦り切れていたが、短いスカートを含めその色を判別できる程度には無事である。大きな瞳だけは、変わらず光をたたえている。果然とも恍惚とも見て取れる曖昧な表情のまま、少女はひたすらコンクリートで舗装されていたはずのひび割れた道を危なげに歩いていく。

彼女は無目的に歩き回っているわけではなかった。家族を、友人を、赤の他人でもいい生きている人間を探していた。ただし、探している目的は彼女自身わかっていなかった。助けを求めようとも、助けようとも思っていない。彼女の家族は彼女と血が繋がっていない。友

人といえば数人しか頭に浮かばない。それでも、双方失う痛みはきつと壮絶なものに違いない。少女はふと、喉が渴いていると気付いた。だからといって、喉を潤す水もない。

どれほど歩いたであろうか。幼い子どもの足では進んだ距離はたいしたことないかもしれないが、少なくとも、日が傾きはじめる程度の時間は過ぎていた。歩き続け、歩き続け、太陽が沈みかけたころ、ようやく自分以外の人間を見つけた。彼らはみな身体のだこが欠けていて、赤い水溜まりに寝そべっている。喉の渴きがいよいよ警鐘を鳴らしていたが、その赤い水は飲む気にならなかった。

意味もなく振り返り、少女は息をのんだ。すべての遮蔽物が取り除かれ、地平線まで見えるようになった街並みに真っ赤な光が差し込んでいた。足下に広がる凄惨な景色などまるで無関心に、あるいは嘲るように、世界は朱に染まっていた。それから少女の心の原風景となる夕焼けの空。このとき少女は、確かに、その景色に感動を覚えていた。人のいない世界は、こんなにも、美しい――

「……ねえ、あやめ、あやめ、聞いてる？」

「は、はいっ？」

そしてあやめは現実へ引き戻され、名前を呼ぶ声に反射的に返事をする。夢から覚める浮

遊感もまばら、目に焼き付いた朱は臉の裏側でちろちろと緑色の炎を揺らし、鈍い痛みが頭にずっしりとのしかかる。

あたりを見渡すと、忙しく動きまわる多くの人、いくつものディスプレイ、あやめにはよくわからない機械と無数のボタン。テレビ局の放送室に似ていたが、もちろん局員でも関係者でもないあやめがそんな場所にいるはずがない。ここはれっきとした『学園』の敷地内だ。

「あのね、もう少し緊張感をもってほしいのだけど。自分の役目、わかってる？」

「はいーすみませんー。わかってるのですがどうしても忘れがちで……もちろん緊張感の話ですよ」

そしてあやめは困ったように笑みを浮かべ隣の女性を見上げた。あまりよく手入れをしていないくすんだ金髪、碧色の眼、下から見上げるとより一層わかる高い頬骨は彼女が西洋の生まれであることを誇らしく語っていた。名をセーラという。本名なのかどうかあやめは知らなかったが、些末なことは気にしない性格だった。

対してあやめは今年で十六になるにもかかわらず、身長は一四〇をほんの少し越えただけ、幼児体型型とはいわないものの身体的大部分はまだ女性らしい丸みをもたず、流れ落ちる直線美を制服で隠している。腰まで届く烏色の髪を含め外見は純日本人そのものだが、その瞳だけは異彩を放っていた。彼女の瞳は紅かった。不吉を告げる星のように、紅く輝いていた。

「立ったまま寝るなんてずいぶん器用ね」

「やーそれほどでも。実際はここに来た記憶もないので歩きながら寝てたかもしれません」
悪びれる様子のないあやめにセーラはため息、無数にあるディスプレイの一つの前にあやめを誘導する。そこでは男性がマイクに向けて何やら話していたが、あやめは一切興味をもたず耳に入ってくることはなかった。それよりも、ディスプレイに映った一台の車の方があやめは気になった。

「状況は？」

セーラが目の前の男性に問いかける。

「膠着してますね。侵入者は以前として不明、この車の目的も所属も未だわかってません」

「そう」

セーラが短く返事する。

「面倒だから簡潔に説明するわ」

「いやーそこは面倒くさからずにきちんと説明してくださいよー」

セーラのなげやりな態度にあやめは再度笑う。なんともおざなりなことか。

「一時間前に敷地内に何者かが侵入したわ。正体も目的も不明だけど、まだ山間部にいるみたい」

「はあ」あやめは気の抜けた返事をする。

「ただし、姿は確認できてないわ。カメラには映らず、ましてセンサーにも反応はない。つ

まり――」

一拍あけ、セーラは目に鋭猛な光を宿す。その表情は、新しい玩具を与えられた子どもより数倍無邪気で嬉しそうだった。

「――『新人類』の可能性が高い。十分に気をつけて」

「それでわたしが。さいで」

「それともう一つ、その侵入者を追うようにして麓に不審車が現れたの、銀のステーションワゴン。監視カメラじゃ解像度が悪すぎて中身までわからないわ」

「いやワゴンで山にきてもいいと思いますよーほらこの地上高なら山道だつてすらすらとー……」

「馬鹿言つてないで早く準備してきなさい」

「……はい」

その実、あやめに説明は不要だ。彼女はそこに呼ばれるだけで目的と役割をわかっていた。

そこは『学園』の警備の一角を担う管制塔。あやめの役目は、侵入者の捕獲および排除。

『学園』の機密を守るためならば殺人も厭わない、都合のいい殺人鬼。

銀のステーションワゴンのなか、黒い衣服をまとった男女あわせて三名。見る者が見れば

彼らが何者かすぐにわかるだろうし、なにも知らない者が見ても、雰囲気からある程度の推測はつくだろう。すなわち、彼らは殺し屋だった。

殺し屋らしい殺し屋はいない。彼らはみな、殺意を隠し雑踏にまぎれるようにして生活している。だがそれは、一般での日常の話。今、彼らは一般での非日常に足を踏みこみ職務を全うしようとしている。ならば、不要な隠べいは捨て殺し屋らしくしたほうが都合がいい。

リーダー格の男が合図し、一斉に車をでる。周囲に人がいないことを確かめ、当然のようにアサルトライフルを手にする。

殺し屋は、人を殺す道具をもつ。アサルトライフルだけではない、腰にさげた拳銃も、懐にしのばせた手榴弾も、全身に隠したナイフも、ひときわ身長の低い女性が銃身下にとりつけていたグレネードランチャーも、すべて人を殺すという共通目的のためものは当然のことだった。

彼らは前方に広がる森へ向け歩きはじめ——弾かれるように一斉に銃を構えた。

その先には、水平に並んだ二つの紅い光があった。月明かりの下、まるでそれ自体が光源であるかのように輝いた、紅。

彼らは半自動的に引き金をひいた。アサルトライフルの一斉掃射、それと同時に、紅は光の尾をひいて高速で横に移動し——彼らの視線を振り切って、リーダー格の男の懷まで滑りこむ。男は見失った光を追ってあたりを見回す。足下に忍びよった殺人鬼を、彼は気付かない。

「ボスッ!!」

背の低い女性が鋭い叫びをあげる。男はようやく気が付きその場を跳び退こうとする。だが、遅すぎる。その遅さは、文字通り、致命的。

そして紅は、男の喉をえぐりとった。男の脳はまだ生きていたが、身体との繋がりを完全に切断された男になすすべはなく、ただ倒れる自分の身体を見守るほかなかった。

男が死んだことを確認するまでもなく、残りの二人は銃を構える。それよりも早く、紅い光は片方の女性に肉迫し——その片目を貫く。脳にまで達した傷は女性をたやすく即死させる。

背の低い女がなにかを叫んだ。だが、それは言葉として意味をもつ前に、くぐもった水音に変わった。喉から、口から、血を吹き出す音だった。

そして、三人分の死体が並んだ。

あやめは三人分の死体を見下ろしていた。真紅の瞳が地に向けられる。

無感情に死体を見下ろし、ナイフについた血を拭う。血以外にも粘着質のなにかついていたようだったが、かまわずナイフを拭い、腰にくくりつけたシースに収める。

死体は別動隊のだれかが処分するはずだった。だれかわからない人間を殺し、だれかわか

らない人間が処分する。すでに数えきれないほど繰り返された、殺人鬼の所業。

あやめは顔をあげ、山に向かって歩きだす。今宵の仕事は、まだ一つ残っている。

風が吹きだしてきた。山がざわめく。さらさらと流れる髪を押さえながら、あやめは音もなく、影のように闇の中へまぎれていった。

もはや立ち上がる体力はなく、ただ腰をおろして木にもたれかかっていた。

風がでてきたが、火照った身体にはちょうどよく、気持ちがいい。思わず吐いた息は、疲労の色がとても濃かった。熱をもった吐息はすぐに風にながされる。

少女は立ち上がろうと身体を動かそうとした。だが、これまでに何度も試したとおり、まるで動かない。意識は朦朧とし、ぼんやりとした頭で、なおも立ち上がろうと身体を動かそうと試みる。

少女の年は十に達するかどうかといったところだった。黒髪は肩にかかるあたりで切りそろえられ、白いリボンが風にあわせてゆれている。パーカーとスカートを身につけ、手にはなにももっていない。森に入り山に登るには、だいぶん許ない装備だ。

少女はいよいよ立ち上がることを諦め、天を仰ぐ。今夜は晴れていたはずだが、見上げた空は木々に囲われまったく見えなかった。地面には苔が我が物顔ではびこり、そのぶよぶよした肌が少女に触れている。きつと、日中でも陽の光は地までとどかないにちがいない。

暗闇を通して葉の茂みを見つめ続けても意味はない。仕方なく視線を前にもどし——少女は目の前に異様なものを見つけた。

紅い、紅い、月のように大きな星。真紅の輝きをはなち、いくぶん低い位置で水平にならびまたたく光。とても綺麗で、どこか不吉で、なにかを予感させ、そして禍々しい。

ぼんやりした頭で光の正体を考えながら、やがて光が近づいてきていることに気付いた。ゆつくりと、だが確実に大きくなっている。少女は幽霊の類は信じていなかったが、それでもその光にたいしては言い知れぬ恐怖を抱いた。実在しない非現実にたいする不可解な妄想の恐怖ではなく、もっと現実的な実感をともなった恐怖。反射的に逃げようとして身を振り——身体が動かないことを忘れていたため、うまくバランスをとれず倒れる。それでも、光から目をそらさない。

紅い光がほぼ真上まで迫ったところで、ようやくその正体を知った。これは瞳だ、生きた人間なんだ。人が目の前に立っていた。

なにも見えない夜空を背に、紅い目をした人間が少女に向けて手をのばす。不自然に明るいその瞳は——笑っていた。そして少女は予感する。

——この人ならば、きつと……。

身体に触れた手の温度を遠くに感じながら、少女は意識を手放した。

《第三研究所》一室。

藤堂雛魅は自室で一人パソコンに向かい日記を書いていた。今日の日付を入力し、ほんのわずかばかり思案顔を天井に向けてと、素早くキーボードを叩いていく。

「あやめが新人類を連れてきた。年のころは十前後、身長一五〇センチ、黒髪のセミロング、典型的な日本人。追っ手がかかっていたらしい。おそらく、この『学園』に似た施設から脱走してきたものと推測される」

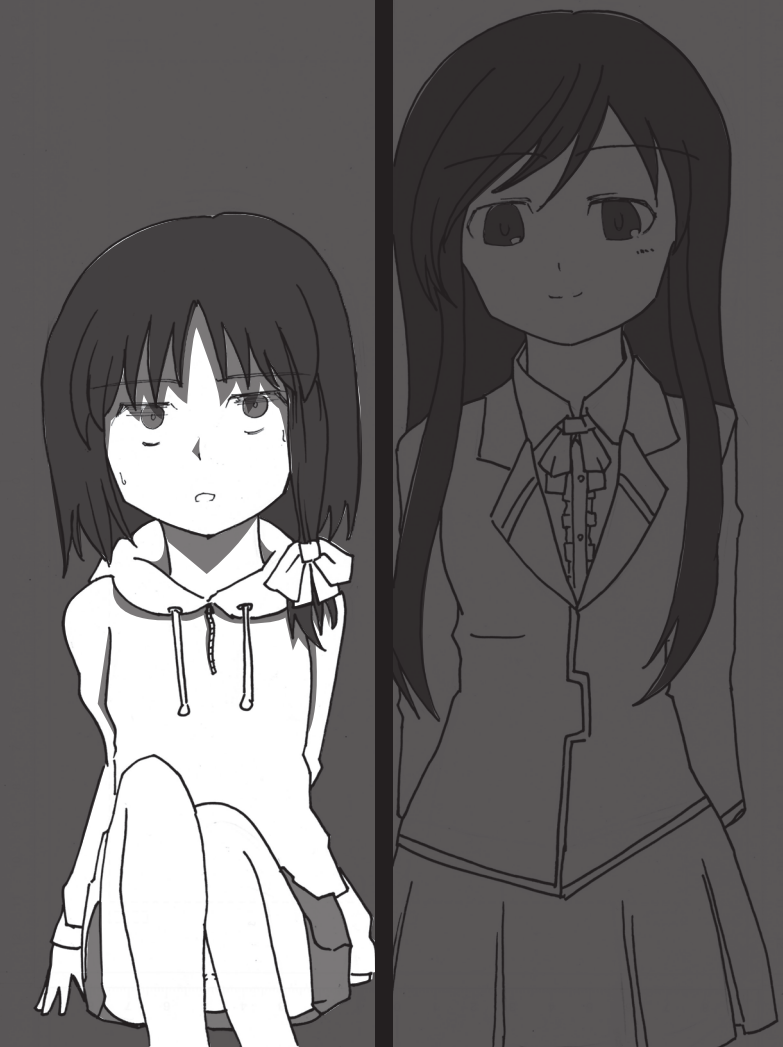
そこでメールの着信を知らせるアイコンがディスプレイに現れる。日記を書く手をとめ、内容を流し読みすると、再びキーボードに手を滑らせる。

「そもそもなぜ我々新人類が世間から姿を隠して生きなければならないのか。そこにもはや説明の余地はなく、人類の浅はかな淘汰の歴史はここで記さずとも永劫語り継がれることは間違いない。

人によつては、新人類を『早すぎた役者』と称する。なるほど、『進化は跳躍しない』というかつて偉人が生み出した論理を、他ならぬ人類が踏み躪ってしまったこの舞台は、我々には過ぎた筋書と見える。とはいえ、我々はあくまでも人類であり、その特異性を除けばまた――」

「……またまどろっこしい書き方するねー雛魅」

「なっ……!?!」



背後から聞こえた異物に雛魅は過剰なまでに反応する。びくりと身体を震わせ、すさまじいスピードで振り返った。立ち上がった拍子に椅子が派手な音をたてる。

「あや、あやめっ……なんでここにいるのよ!？」

「あわてる雛魅も可愛いな……あ、鍵なら開いてたから」

「そこは問題じゃない!」

雛魅はすぐに画面の電源をおとすと、あやめに向かい合った。

「別に隠すことないでしょ……日記なんて人に見せるために書くようなものじゃない。あと年ごろ十っていうかほぼタメとか書けばいいと思うの」

「いやその考えおかしい。あやめの考えはたいいていおかしい。タメとか使うのもおかしい」

「ああ……さりげなく悪口……」

いじけるフリをしてあやめはベッドに倒れこむ。台詞とは裏腹に、楽しそうに笑ったままであったが。

「ベッドも私の……まあいい。どうしたの?」

「んー?」 あやめは首だけをまわし部屋中に視線をめぐらせる。

そう広くない部屋は暖色の蛍光灯にやわらかく照らされている。床は全面、赤いチェック柄のカーペットで覆われていた。四隅にはそれぞれ、あやめが寝転がっているベッド、パソコンが大部分を占める机、背の低いクロゼット——まだ成長期すらむかえていない雛魅でも



上まで届く仕様——が置かれ、観音開きの扉の前だけはないにも配置されていなかった。

「……年頃の娘の部屋にしては殺風景だと思うの」

「あやめに言われたくないのだけれど。あとこれは殺風景じゃなくて、不要な物を置いてないだけ」

「それが殺風景なんじゃないのー?」

部屋の主を無視し、あやめは手に持った大きなビニール袋から一メートルほどの高さの観葉植物をとりだした。それを適当な位置——迷った末、机の隣に置く。

「……どこからもつてきたの、そんなの」

「温室に決まってるでしょー」

満足げにうなずくと、あやめは再びベッドに腰掛けた。隣に突然現れることになった木を気にしながらも、雛魅もパソコンの前に座りなおす。

「虫とかついてないでしょうね」

「だいじょぶだよー」

「……ならいいけど」

実際よくないけど、と雛魅は口のなかでぶつぶつぶやく。あやめは笑顔をより一層輝かせ、自分のもつてきた観葉植物を眺めていた。

「でさーわたしが連れてきたあの子なんだけどー」あやめが言った。

「突然なに?」

「どこから来たんだろうね」。こんな世界で——

——一世紀ほど昔、人類は二種類に分かれた。一つはこれまでの人類、そして『新人類』。

彼らの外見は人類と全く同じであるが、その能力は大きく異なり人類をはるかに上回る筋力と知力をもっていた。だが、人のエゴで生まれた彼らは人のエゴで絶滅の危機に瀕する。

はじめ、彼らは人類の関心を強くひいた。あるいはその時からすでに——新人類にたいする淘汰は始まっていたのかもしれない。研究を重ねるうちに危険を感じた人類はやがて新人類の根絶やしにのりだす。自分たちの領域を侵しはじめた新人類を、人類は黙って見過ごすわけにはいかなかった。果にまぎれたカッコウの雛は、親鳥から総攻撃を受ける羽目になった。

そうしてしばらく時は経ち、無力で、争う気など露ほどもたなかった新人類はその姿を史上から消した——ように見えた。

実際はそれからも世界各地で新人類は誕生しつづけ、たいていの場合、すぐさま殺される。

なんらかの理由で永らえた者は、だがそれでも安心して生活を送れない。正体を隠し人類にまぎれて生きようとも、その正体が明らかとなれば即座に殺される。それほどまでに、人類は新人類に対して敏感であった。

そんななか、ごく稀に、新人類に対して友好的な態度をもつ人間も現れたのも事実である。

彼らは社会から排斥される新人類を匿い、保護し、その人生を助力する。

そして、森で保護された少女は新人類であつた。ならば、彼女はどこから脱走したのか——なぜ脱走したのか、よく吟味する必要がある。あるいは、なぜ『学園』にやってきたのか。「いろいろ考へてゐることはあるけれど」離魅は興味なさそうに答へる。「やつぱり、本人に直接訊くのが早いと思う」

「離魅らしくない。非合理できー」

「なら、あやめはどう思うの？」

「どうでもいいかなー正直」

あやめは寝そべりながら天井を見上げた。天井に向けて手を伸ばし——ナイフをもつように手を握り光に透かして見る。

「必要があれば殺す。必要がなければ……まあ、わたしの関することじゃないしー」

「相変わらず。なら、言わなくていい」

それだけをつぶやくと、離魅はパソコンのディスプレイに向かいはじめた。それきり、二人はしばらく無言で過ごした。

目を覚ます。眼をあけて最初に見えたのは、白く無機質な蛍光灯。ひどく眩しく感じ、すぐに目を閉じる。頭の中で十秒数え、再びゆっくり瞼をひらいていく。今度はほんの少し慣れてはいたが、裸の蛍光灯は寝起きの瞳に突き刺さる、すぐに身体を起こして目をこする。

徐々に視界がクリアになりはつきりとあたりの様子が見えるようになったところで、周囲を見渡す。寝ているベッドはシートも布団も真っ白、ぐるりとレールで囲われていたがカーテンは引かれていなかった。左右には二つずつ、ベッドが並んでいる。正面にある薬品棚はその機能を許容量限界まで全うし、部屋には薬特有の臭いがたちこめている。他にあるものといえば、簡素な机と可動式の椅子だけ。

(一般書類：時刻 一一〇二)

脳内時計を呼び起こすと、十一時をちょうど過ぎたところだった。なにをしようにも、とりあえずベッドからでようと考え、立ち上がりかけて……しまった、と思つたときにはすでに身体は傾き、無様にも床に倒れこむ。冷たいタイルが顔に張りつく。どこも打ち付けてはいないようだが、このままでは、いささか格好悪い。

そしてようやく思い出した。気を失う前の自分の状況を、気を失うまで追い詰められた自分の境遇を。脳内時計から、自分が気を失ってからまだ半日程度しか経過していないことを知る。追っ手を振りぬけ、山に入ったところで力尽き——

——そこで見た紅い瞳を思い出す。

「あ、起きたんだね」

「……………!!」

唐突に声が聞こえた。気の抜けるような、明るい、朗らかな声だった。鈴のように高かったが、反響することなく自然と耳に入ってくる、そんな声。

「無理して立たなくていいんだよ」

部屋を歩く足音が直接身体に響く。自分がどんな格好をしているか気付いたが、どんなにもがいても立ち上がることもすらまならない。やがて軽々と抱き上げられ——一瞬、空を飛んだのかと勘違いするほど軽々と——すぐにベッドに寝かせられる。

「はじめまして」

気の抜けるような声の持ち主は——紅い瞳の少女だった。年上なのか年下なのか判別しにくい、長い黒髪を背中に流し見るものをなごませる笑顔をうかべている。

「……………はじめまして」

「あ、日本語通じるね」

彼女はカラカラと音をたてて椅子をひいてくると、ベッドの傍らに座った。

「わたしの名前はあやめ。桜間あやめ」

まずは自己紹介、とばかりにあやめと名乗った少女は、にこにこ笑顔を向けている。

「あなたのお名前は？」

「……………黒那、です」

あやめに訊かれてようやく——自分の名前を思い出す。そう、黒那だ。私の名前は黒那。

「黒那？名前は？」

「名……………字？」

「そう、名字。わたしは桜間。あなたは？」

「……………わかりません」

「そっかあ」

あやめは困ったように眉をまげて、それでも笑顔を崩さずに黒那の顔をのぞきこむ。嘘かどうか観ようしようとしているのか、あるいは顔色を診ているのか、その視線からは判断つかないが、黒那もじっと見つめ返す。嘘ではないのだから、やましいことはなにもない。本当に、名字は思い出せないのだから。

「んー、じゃあいきなりだけど、いくつか訊いていい？」

黒那のような得体の知れない人間に訊ねるのは、ある意味当然のことである。得体の知れない相手ならば、まずは本人に訊けばいい。

黒那のような得体の知れない人間に訊ねるのは、ある意味不自然なことである。得体の知れない相手ならば、嘘をつく可能性があるからだ、嘘を見破れない可能性があるからだ。それでも、黒那はできる限り正直に答えようと思った。嘘をつく必要などないのだから。

「答えなくては答えなくていいからねー」

「はあ、わかりました」

「あなたの年齢は十歳？」

具体的な質問に、思わず黒那は答えに窮する。それは質問ではなく確認作業なのだろうか。訊いているのは直接の情報ではなく、裏付けなのだろうか。

「はい……あと三ヶ月くらいで誕生日ですけど」

「へえ……のわりには大人びてるねー」

あやめが笑う。常に笑っているのでなぜ笑いだしたのかは判断できなかった。

「あなたは新人類？」

「……はい」

普通は否定しなくてはならない質問。だが、あやめはきつと知っている。そもそも、あやめ本人が――

「わたしもねー新人類なんだよー」あやめは言った。易々と、禁忌に触れた。

「そういうこと、人に言っていないんですか？」

「んーまあ普通はダメだけど……ここはそういう場所だから」

よくわからないが、新人類である黒那がこうして保護されているという事実が、新人類に寛容な証拠なのだろう。この施設がどのように機能しているかはおいておくとして。

「あなたはどこから逃げてきたの？」本題にもどり、あやめは言った。

「……言いたくありません」

本当のところ、知られてもきつと問題はないだろう。だが、黒那は困らなくとも、先方はいい顔をしないにちがいない。だから、ひとまず先送りとする。

「あなたの頭の機械はなに？」

あやめは気にする様子もなく、すぐに違う質問を投げかける。頭、という言葉に反応して自分の頭を触ってみるが、当然といえば当然、手に触れる特別なものはなにもなかった。

「ちがうちがう、あなたの頭の中にある機械」

すぐにあやめが訂正する。それを聞き、ようやく質問の意図を理解する。

「ただの……コンピューターです」

嘘ではない。嘘をつく必要はないのだから。

「コンピューター？ただの？」

「生体コンピューターの試作品なんです。私の脳内の電気信号を感じしていろんなはたらきをします。普通のパソコンができることなら一通りできますよ」

「あ、へえーそんなものあるんだねー」

知らない様子のあやめにもう少し説明しようと思いい口を開くと、第三者の声が耳に届いた。

「……目を覚ましたら伝えなさいと言ったでしょ？あやめ」

入り口に目を向けると、白衣を着た金髪の女性が立っていた。気楽なあやめよりはこの部屋に合っているな、と黒那は思った。

「セーラよ」顔をあわせるや否や、セーラが言った。

「黒那、です」黒那が返した。

お互い自己紹介はそれで終わった。それ以上セーラはなにと言おうとせず、それ以上黒那もなにも訊かない。なんとも簡素な対面だった。

「なにはともあれ、まずは検診からね」

白衣なのはなるほど医者だからか——黒那に上着をまくるよう指示すると、セーラはすばやく正確に黒那の身体を診ていく。医学の心得のない黒那にも、その手際よさはわかった。

ものの数分で検診を終え、セーラはあやめから椅子を奪いとりと机に向かってなにかを書き始めた。手持ち無沙汰になり、黒那はあやめに質問した。あやめは検診のあいだずっと、にこにこ黒那とセーラを見ていただけだった。同性なのだから気にする必要はないのだが、なんとなく気恥ずかしかった。

「あの……」

「ん？ななに？」あやめはすぐに反応した。

「なんですつと……笑っているんですか？」

他に訊くことはあるだろうに、と黒那は自分にたいして呆れる。まだ会ったばかりの相手にいささか礼を失っている質問だと自重した。

「なんで……かな？たしかにわたしはいつも笑ってるかも」

あやめは笑顔のまま真剣に考えだす。「かも、じゃなくていつも笑ってるわよ」とセーラが口を挟んだ。

「いえ……そんな考えていたかなくても——」

「——きつと……」

「……きつと？」

「人間は、笑うものなんだよー」

黒那にあやめの言葉が意味するところはわからなかったが、あやめ本人はそれで納得しているようだった。とりあえず、追及してはならない話かもしれないと黒那は直感的に考えた。

「なんてねー」楽しそうに、あやめは笑う。

「私を助けてくれたのは、あやめさん、ですか？」

今度こそ、本当に訊きたいことをたずねる。森で気を失う直前の記憶を呼びおこすと、あのとき見た紅とあやめの瞳は同じ色をしているように思えた。

「あやめでいいよー」

「あ……はい」

「たしかに、黒那をここにつれてきたのはわたし」

いきなり気絶して大変だったんだよ、と全く大変さを感じさせない笑いを浮かべるあやめ。実際はあまり苦勞してないだろうことは、先ほど軽々と持ち上げられた黒那には容易に予想できた。

「あの、私以外に……だれか、いませんでしたか？」

しかし、黒那を見つけたならば「彼ら」と出くわした可能性は高い。そうすると、少々厄介な事態になるだろうと黒那は考える。

「んー？別にだれも」

だが、想像に反した答えをあやめは返した。

「なら、いいんです……その、ありがとうございました」

「別にいいよ。あれもわたしの仕事みたいなものだし」

『あれも』？ということは黒那を助けたのは事のついでで、本来の「仕事」とは……？黒那のなかで小さな疑念が生まれる。

「あんたらもう少し子どもらしい会話しなさいよ」

セーラが立ち上がり、再び黒那の前に現れる。

「そういえばお二人はいくつなんですか？」ふと思った疑問を口にする。

「十五だよー」あやめが答えた。

「教えない」セーラは不自然な角度で窓の外を見た。

「……あやめはそんなに年上なんですね」正直、高くて二三、もしかしたら年下ではないかとすら思っていた。大人の五年ならばたいした差にはならないが、子どもの五年は途方なく長い期間に感じられる。「あーそれひどくない？」

あやめが抗議の声をあげた。笑ったまま、頬を膨らませる。その様子を見て、黒那は思わず吹き出しそうになってしまった。

「それは『そんなに年上』って言われたことが？それとも年齢下に見られたっぽいことが？」セーラはくつくつと笑いながら黒那の気持ちを代弁するように言った。

「両方」

どう見ても同い年か年下に見える彼女は、どう見ても年下としか思えない態度で拗ねた。

それから黒那の回復をはかうということ、あやめは医務室から追い出された。

見慣れた廊下を歩いていく。(第三研究所)すでに十年もの間通い続けた、新人類の実験施設。その十年がどういったものであったか——あやめはなんの感慨もたず、思い出すこともない。

廊下を歩く。周囲にはだれもない。足音はあやめ一人分、空気は息を潜めるかのように静まり、氷河のように、ゆったりと、あやめの隣を通りすぎる。

不意に、あやめは右腕をあげ——虚空を一闪、音もなく、空気を切断する。

それは、鋼鉄すらも斬り裂く、鋭い風。右手はなにかを持つようにわずかに握り、しかしなにも持たない故になにも斬れない。

「気のせい……？」

わざと声にだしてつぶやく。周囲にはだれもない、足音もない。

それでも、あやめは確かに何かとすれ違った気配を感じていた。だからこそ、斬るために腕を振り上げたのだが——

「——あ」

そして、自分の右手はなにも掴んでいないことに気付いた。あやめは研究所内でナイフの持ち歩きを禁止されている。斬る得物はなく、斬る獲物もない。廊下でおこなう一人芝居。

「まあいっか」

それきり、あやめは再び歩きはじめた。

藤堂雛魅は孤独な人間である。

あるいは孤高な人間かもしれない。孤独な人間は孤高であり、孤高な人間は孤独になる。わずか十歳という年齢にしてすでに研究員として業績をあげている事实は、彼女が孤独なことに無関係ではない。少なくとも、彼女自身はそう思っていた。

人間は独りでいるとき、最も脆く弱い存在であることを自覚する。だからこそ、強者に勝つため、超越者と向かい合うため、運命に抗うため、人は知恵を発揮する。人間のもつ唯一にして最大の武器を、最も使いこなすことができる。それが雛魅の信条だった。

彼女は孤独な人間だ。ほんの些細な変化でさえも彼女は敏感に察知する。独りならばあり得ない変化を、彼女は感じ取ることができる。

「開いてるわ」

キーボードを叩く手をとめ、扉へ向けて声をかける。一瞬の間のあと控え目に扉が開かれ、黒髪の少女——昨日あやめがつれてきた少女が顔をだした。

「なにか用？」雛魅は抑揚のない声で問う。

「……ごめんなさい。お仕事の邪魔しちゃったみたいで」

「別にいい。今やってるのはたいしたことじゃないから……あなた、名前は？」

「黒那です」

黒那は一歩だけ部屋に踏みいると、そっと扉を閉じた。

「私は雛魅」

不思議な雰囲気をもった少女だ、と雛魅は思った。第一印象。どこか怯えていて、常に周囲に気を配っているのに——その奥底には絶対的な自信がある。すなわち、なにがあるうとも自分だけは大丈夫、と。柔らかく見えていながら、とても鋭利な目をもっている。こんなにも鋭い目は、雛魅の知るかぎり他に一人しかない。その一人も、その鋭利な目に似合わない暢気さをもしだしているが。

「あなたね、昨日『学園』に侵入したとかいう新人類は」

「はい……その、『学園』がなんなのかは知りませんけど」

黒那がさらに一步雛魅に近づいた。雛魅は自分の座っていた椅子をすすめると、自身はベッドに腰掛けた。黒那もおとなしく椅子を引く。

若い少女が二人、向かい合う。だが、二人の纏った空気はあまりにも張り詰めたものであった。黒那は薄い膜が張りついたような息苦しさを覚えながらも、座った以上すぐに立つことはできなかった。

「『学園』を知らないで……なんでここにきたの？」

「えつと……なんででしょうね」

「敬語は知らない。同い年だし」

「あ……ごめん」

謝らなくていい、と雛魅はため息混じりに黒那を諭す。あやめよりも年上に見えるのに、と黒那は内心でつぶやいた。

「『さつき』の、あなたの妖精？」

「……え？」

話題を突然かえる雛魅の質問に、黒那は明らかに表情を変えた。

——『妖精』。その起源はイギリス人のある青年にさかのぼる。狂人と罵られ迫害の人生を歩んだ彼の遺産。すべてを否定されながら、彼が短い生涯をささげた唯一の研究成果。

『妖精』とは、誤解を恐れずいってしまえば、現実に影響を及ぼすアプリケーションソフトである。本来ならば基盤をもとにコンピュータの画面上でのみ情報を処理するソフトウェアが、現実そのものを『書き換え』てしまう。世界中張り巡らされたネットワークを無作為に放浪する、電子上の仮想生命体。それが『妖精』。

妖精は、世界さえも変転する。非現実的と思った出来事は、十中八九妖精の仕業と考えられる。

「……わかったの？」

「なんとなく。気配がしたから……たぶん、ドアの向こうの人がなにかしたのかなって」

黒那は雛魅をじっと見つめていたが——結局、口を開くことにはした。

「うん、そうよ。私の妖精」

（『くろつき』起動）

黒那は頭の中でスイッチをたたく。視界が「頭の中の自分」と二重映しになり、視覚で感じる景色とは別に、コンピュータのウィンドウが何層も現れテキストを表示する。そのうちから一つを選択すると、記憶領域で眠っていた妖精を呼び起こす。

すると、目の前に小さな——それでも実物と比べると異常なまでに大きい——蠅が現れた。複眼ははめこまれたガラス玉のように統一され、顔のわりに身体がやけに小さい、子どもの落書きのような不恰好な蠅だった。コミカルな外見は、一種のユーモアさえ感じられる。

「……不細工」ぼつりと、雛魅がつぶやいた。「それに、ひどく地味」

「いいでしょべつに」

雛魅の言葉に黒那はふてくされ、さっさと妖精を戻してしまふ。

「それがあなたの妖精なのね」

「うん。人に見つからないで周りを見てまわる、探査用の妖精」

そう、人には見つかからないはずなのだが——廊下を探っていたつい先ほどはあやめに殴られそうになり、部屋の中をうかがおうとした瞬間雛魅には気付かれてしまった。『くろつき』の性能が悪いのか、ここの人間がでたらめなのか。

黒那の思考を読んだかのように、雛魅はなんでもないとでもいったげに言った。

「どれほど完璧に隠べいされようと、それが必ずなんらかの影響力をもつならば気付か

れないなんて無理。あやめも——あなたが知ってるか知らないけど——彼女は私以上に、そういうことに敏感」

すまし顔で事もなげに言う雛魅にどのような感情をもったのか、複雑そうな表情で黒那は雛魅を見ていた。

「雛、魅？は……ここでなにしてるの？」

「なに？」雛魅は腕を組み顎に手を添えた。「なにと言われてすぐに答えられることじゃない。やっтерることといえば、とりあえず『研究』じゃないかしら」

一応研究者だしね、と雛魅は付け足す。

「研究？なんの？」

「いろいろ」雛魅はつまらなそうに言うと、立ち上がり黒那を立たせた。

「そろそろ医務室に戻った方がいい。研究所の探検なんてしないで、早く休みなさい」

一方的に話を打ち切る。なぜわざわざ妖精を使ってまで人に気付かれないよう探索していたのか、一切訊ねずに雛魅は黒那を部屋からだした。

「まずはゆっくり休養をとって、これからのことはこれから決めればいい」

「私は……どうなるの？」不安そうに、しかしどこか確信した絶対的な安心感の滲む声で黒那は訊ねた。

「さあ？私の知ることじゃない。とりあえず、あなたの意思を尊重するわ」

「ここで生活したいと言ったら？」

「ここで生活すればいい。規則は面倒だけど『学園』も悪くない」

「ここから逃げ出したいと言ったら？」

難魅はさっさと自室に戻り、扉を閉める直前、黒那をまっすぐ見つめた。

「ここから逃げ出せばいい。止める理由はないし止める必要もない……逃げたいなら、あやめに頼めばいいわ」

朝は当たり前のようによってくる。夜明けに特別な感動をもつことなく、一日は始まる。

それは、朝をむかえる場所が変わっても特に変わることはない。黒那は研究所内で夜を明かしたが、それで変化することなど目覚めに見る天井の模様くらいなものだ。

「昼からは自由にしていいから。あやめにでも学園を案内してもらいなさい」

セーラにそう言われ、朝から何も口にすることなく診断を受けることになった。昨日のような簡単な問診ではなく、機械を使った精密検査らしい。

——新人類なのだから、ほとんど無駄になるだろうに。診察台に寝かされ重低音を放つ機械に囲まれた黒那がぼんやりと考える。新人類は機械に映らない。監視カメラをだしぬくには重宝するが、こういった場合は不安になる。監視カメラをくぐり抜けなくてはならない場

面など人生にほとんどなく、結果としてデメリットにしか感じられない新人類の特徴。

そしてさらに半日を研究所で過ごし、ようやく解放されたころにはすでに太陽は頭上より西寄りになっていた。朝日が差し込んでいた医務室は今や太陽に照らされず、むしろ薄暗さをもしだしていた。

医務室をあとにし、とりあえず外に出ようと廊下を歩きだす。

（一般書類：時刻一四二〇）

脳内時計を呼び起こす。そういえば頭の中の生体コンピュータについては訊かれなかったなと思いつつ、出口へ向かう。『くろつき』によつてこの第三研究所の構造はだいたい把握していたが、迷うことなく廊下を歩く黒那にたいして疑問を抱く者はいないようだった。

「あ、きたきたー」

そうして外に出た黒那を待っていたのは、笑顔をたたえたあやめだった。

黒那は、目を逸らした。目線を地に向けたまま、あやめに言う。

「学園を、案内してもらえますか」

「もちろんだよー」

朗らかに、陽気に、あやめは答えた。雲がかかるとは想像もつかないような、快晴。

それは、どこか色彩の欠けた表情に見えた。あやめのことはまだなにも知らないが、どんな曇天の空より灰色に見えた。

「それじゃあ、どこへ行こうか？」

歩きだした直後にあやめは立ち止まり、振り返った。半歩遅れて歩く黒那も合わせて立ち止まる。

「そもそも、ここはどこなんですか？」黒那が訊いた。

「ここは研究施設の……まあ、《第二研究所》って呼ばれてる建物の近く」

さっきまでいたあそこね、と数メートルしか離れていない無機質な雰囲気建物を指差す。

「第二つてことは……もっとたくさんあるんですか？」

「んー八個くらいあるかなー。みんな仲悪いけど」

困ったように笑うあやめに、黒那は重ねて問う。

「なんの研究をしてるんですか？」

だいたいの予想はついていたが、予想はあくまで予想でしかない。そして、あやめならば絶対に嘘をつかないと確信していた。彼女に建前はない。数言しか交わしていないが、それが黒那のあやめにたいする評価だった。

あやめはあつさりと答える。世間からすれば触れてはならない禁忌を、決して口外してはならないはずの秘密を。

「新人類について」

黒那はそれから黙る。表情を変えず、ただ、あやめを見つめる。

「なにより先に校舎かなー。あそこがだいたいの中心だし」

黒那が黙ったことに気付かないのか、あるいはあえて無視しているのか、あやめは変わらぬ調子で続けた。

「それでいいよね？」

もちろん断る理由はなかったが、黒那は声にださず首肯した。

延々と続くような金網の柵を抜け、中心部にあるという校舎にやってきた。あやめという人物は『学園』側から相当な信頼があるのか、黒那のような得体のしれない人物とともにあらうともあつさりと言部員に通され、隔離された研究施設から出ることができた。

「ここが校舎だよ」

巨大な建造物を背に、あやめは黒那に振り返った。

南に向かいコの字を描くよう建てられた校舎は五階建てで、それがスペイン風なのかイタリア風なのかイギリス風なのか建築に矚み黒那にはさっぱりわからなかったが、なんとなく雰囲気だけは西洋風だと感じとった。

「外見はこんなだけど、中身は普通の学校だから」

黒那の受け取った印象がわかったのか、あやめは苦笑を浮かべて言った。

「校舎はこれだけなんですか？」

「そだよー。東側が初等部……黒那が通うところだね。西側が中等部、真ん中が高等部だよ」

「全部おさまるんですね」

「中に入ると外見以上に広く感じるからねー」

「生徒は何人くらいいるんですか？」

「一学年三〇〇人くらい……あーでも上の方は二〇〇いくいかいかわからないかも」あやめは指折りしながら答えた。

「上の方？なんで少なくなるんですか？」

「んーとね、校舎の窓は十センチ以上開かないんだよ。なんでだと思う？」

「危険だから」黒那は素っ気なく答えた。

「正解。より正確にいうなら、自殺防止のため」

あやめは笑顔をまったく変えないまま、明るく言い放った。

「それじゃ、次行こうかー」

黒那は、あやめの後ろを辟易した様子で付いていった。

「ちなみに、普通の学校っていったことある？」

「……かろうじて」

「おー。黒那は幸せ者だねー」

そして東へ向かって歩くと、やはり洋館のように飾り立てられた建物に近づいた。遠くからではわからなかったが、それは校舎以上に大きな建物だった。

「これが寮。生徒はみんなここに住むの」

「寮……すいぶん大きいですね」黒那は正直な感想をもらす。

「みんないるからねー。どうしても大きくなっちゃうの」

しばらく見上げてみると、ひどく首が疲れてきた。最上階には住みたくないな、次に黒那が抱いた感想はそれだけで、ただじつとしていた。あやめは近くの木に背を預け、そんな黒那を見ていただけだった。

「中については……中に入ったとき誰かに訊いてね」

「そんなこと言われても困るんですけど……」

あやめは軽い調子で続けた。「大丈夫だよー。基本的にみんないい人だから」

基本的、という曖昧な区別が一番怖いのだが、と黒那は思う。その区別を見切る目を、私は持っているのだろうか。あやめを見ていると人を見る目に自信をなくす。

「困ったら風紀委員か生徒会に訊けばいいんだよー」

「あ……それならなんとなく、安心できそうですね」

「相談窓口はあとで教えたいねー」

あやめは笑っていたが、唐突にその笑みは困り顔を表現する笑みに変わった。

「ただ……高等部の生徒会はやめといった方がいいかも」

「え？」

「いや別に、悪い人たちじゃないんだけどねー」珍しく、あやめが言いにくそうに口籠もる。
「まあ、ここにいれば、そのうちわかるよー」

そしてあやめはさっさと歩き始めてしまった。

寮からそう離れていない位置に『商店街』と呼ばれるらしいところがあった。全面をガラス張りの天蓋で覆われ、地面は石畳で固められていた。相当に広く開けた場所だったが、この時間に人影は全く閑散としていた。

「必要なものはここで買うの。ただし、みんなお金なんて持っていないから配られるチケットがお金の代わり」

あやめはそう説明した。

「ずいぶん広いですね」

「一応まだ地下にもあるんだけどねー」

休憩してく？と問いかけるあやめに、黒那は首を振った。

「じゃ、まだまだ結構歩くよー」

軽やかな歩調で進みだしたあやめを、疲れた黒那はかろうじて追いかけた。

そしてようやくたどり着いたのは、大小様々に並んだグラウンドであった。傍らには体育館と思われる建物が二つ並び、小さくテニスコートまで見えた。生徒らは放課後になったのか、あたりのざわめきとともに人影は徐々に増えていく。

「……人数のわりに狭くないですか」

「あうー……それ言われると辛いんだよねー」

相変わらずあやめは言葉と表情が噛み合っていないかったが、実際困っているだろうことは遠目から生徒らの活動を見ていけばなんとなくわかる。あやめはどう見てもスポーツマンタイプではなさそうだが、血気盛んで旺盛な青少年たちにはいささか物足りないにちがいない。

「『学園』じゃさー、やることっていったら勉強か部活動くらいなものなんだよねー」

あやめがグラウンドを見ながら言った。

「ここは外部との接触を可能なかぎり断ち切ることにしてるから……生徒はテレビも本もラジオもインターネットもほとんど目にすることはないの」

「……………」

黒那は黙ったまま、あやめの言葉に耳を傾ける。

「だから、することっていつたら勉強か部活動だけ。だれも勉強なんてしたからないから、唯一の安息の場が部活動になるの」

「それが……」黒那が口を開いた。「窓が十センチしか開かない理由」ですか？」

「ま、おおもむそんな感じ。なのにこんな狭いんじや、浮かばれないよねー」

二人並んで、遠く動き回る人影を見ていた。

ここは鳥籠なのかもしれない、と黒那は考えるようになっていた。異常なまでの閉鎖性と機密性、それはつまり新人類のためであって、それがすべてなのだ。なぜ黒那のような異分子がこうも簡単に受け入れられたのか、それは黒那が新人類だからに他ならない。

隣にいるあやめは、いつも笑顔の新人類は、一体この『学園』をどう思っているのだろうか？この世界をどう思っているのだろうか？ちらりと横目であやめの顔をのぞき見るが、その笑顔からはなにも読み取れない。

「そろそろ次行こっか。ここは授業でも使うから、しつかり覚えてね」

そうしてやはり、あやめから歩きだし黒那は後を追いかけた。

最後に案内されたのは、敷地からやや外れ森の中に踏み入れた場所であった。

「みんながみんな知ってるわけじゃないけどねー」

そうして木々を抜け視界が開けたところにあったのは、古びた温室だった。モザイクがかったガラス張りの壁を透かし、色とりどりの花々が中に咲いているのが見て取れた。

「ここは？」

「わたしが育ててる温室。わたししか使ってないけど、ちゃんと機能するんだよー」

ここだけは、中まで案内される。扉を抜けると心地よい暖かさに身を包まれ、芳しい香りにしほし心奪われた。

「……すごいですね。一人で世話してるんですか？」

「んーそうだけどー……だいたいは機械にまかせっぱなし」

あやめが天井を見上げる。つられて黒那も見上げると、中央にある通気孔のすぐ隣に巨大なコンピューターがあった。おそらく、あれが管制の役目をし、この快適な空気を作り出しているのだろう。

「わたしに用があったら、ここが研究所に来ればいい。そうすれば、たいてい会えるから」

「……用事があったら、ですけどね」

「きつと、必要になるよ。ううん、必要なんじゃない。それがわたしのお仕事だから」

珍しくあやめの表情から笑顔が消えていた。笑顔以外の表情は初めて見る気がする。吸い込まれるように、黒那はじつとあやめを見つめる。

「どういう、ことですか？」

「どうなんだろうね。わたしにもよくわかんないや」そして、あやめは笑った。

「変なわたし」

「自分で言ったら世話ないですよ」

「そうだねー」

あやめが何のつもりでそう言ったのかわからなかったが——少なくとも、黒那はあやめの言葉をどこかで理解していた。近い未来、そう遠くはない内に、確実に黒那はあやめを必要とする。それは、森の中で始めて紅い光と目をあわせた時にも感じた、予感。

でもそれはどっちなのだろう？ 黒那は思う。あやめが黒那にもたすのは——

「——一応、覚えておきますよ」

黒那はそれ以上考えようとせず、ぶつきらばうに言った。

「今日はありがとうございました」

研究所に戻り、黒那はあやめに礼を述べる。あやめは笑顔で受け取ると、別れを告げて寮へ戻ろうとした。

「そういえば」

踏みとどまり、あやめが再び黒那と向き合う。

「黒那は『学園』に住むことにしたの？」

「そうですね……行くアテもありませんし、そうしようかと」

黒那がそう言うのと、あやめの笑顔は一層輝き、黒那の手をとってぶんぶんと振り回した。

「ようこそ、『学園』へ！」

子どものように無邪気に喜ぶあやめを見て、彼女は自分より背が低いのかと黒那は初めて気が付いた。

空は今日も快晴。耳障りでない程度の喧騒に満たされ、目障りでない程度の人が溢れる『学園』は、その特殊性に似合わないほどにくく普通の活気あふれる学園だった。そんななかをあやめは一人研究所に向かって歩き、喧騒から足を遠ざける。

『学園』は新人類を研究するための施設だ。新人類の子どもを集めるためにわざわざ学園という形態をとっているものであり、もちろん集められた新人類は研究の対象となる。その全員はいずれかの研究所に所属し研究の協力を義務づけられるが、今あやめが研究所に向かっているのはそのためではなかった。

警備員に頭を下げ、仕切られた施設に踏みいれる。そこに境界はある。単純な物理的境界だけでなく、にぎやかな『学園』から陰鬱とした静寂に包まれた『研究所』に変わる境界。

「……こんにちは」

途中、見慣れた後ろ姿を見つけた。ほとんど足音もたてず歩くのが習慣となっていたが、

声をかける前に彼女は振り返りあいさつをする。

「こんにちは。黒那、学園デビューはどうだった？」

しばらく黒那は無言だった。回答を拒否する無言なのか、返答をためらう無言なのか、黒那が口を開くまであやめは黙って笑っていた。

「……まあ、悪くないと思いますよ。あやめみたいにみんな親切ですから」

「それはよかったー」

そして、二人並んで歩きます。黒那はまだ所属する研究所は決まっていなかったが、どうせ〔第三研究所〕が独占するにちがいない。目的地は同じなのだから並んで歩く。年齢はちがえど、二人はもう会話を交わす仲なのだから。

だが、会話とは人二人いても必ずしも起きるものではない。その程度の行為でしかない。それでも『学園』には会話があふれている。必要なものでなくても、人は望む。

しばらく歩いているうちに、黒那からあやめに話しかける。

「あやめは……」

「んー？」

「『学園』では、どんな生活をしているのですか？」

他愛ない会話。あやめは拒絶することなく、笑顔で答える。

「わたしは別に普通だよー。新人類だからたまにちよつと変なこと任されたりするけど。わ

たしはそんなに優秀じゃないし、特に変わったこともないからねー」

あやめの瞳は陽の光を反射し、どこまでも透明に紅く輝いていた。底の見えない目だった。

黒那は一度視線を投げかけるが、直視できずすぐにそらす。

「あやめは……十分おかしな人ですよ」

「それひどいなー」

そらした視線を追うように、あやめが黒那の顔を覗き込む。あやめの方が身長は低く、必然的に下からもぐりこむ形になる。

かまわず、黒那は続ける。

「なんだか灰色な人だと思ってましたが……今は、透明な人だと思えます」

「どういう意味かな？」

「私にもよくわかりません」

会話が途切れ、第三研究所にたどり着く。黒那は再び診断のために医務室に向かい、あやめは別れて研究所内のロッカールームへ向かう。

「それじゃ。離魅によろしく」

「うん、お大事にー。いつの間にか仲良くなって嬉しいな」

あやめは黒那に背を向け、速度をあげて歩き進む。

ロッカールームにたどり着くと、ポケットから鍵を取り出して差す。開かれたロッカーに

入っていたのは、大振りのファイティングナイフとそれをしようためのベルト付きシース、そして携帯端末が一つ。

あやめはまずナイフを手につくと、手慣れた様子で制服の上から革の細紐をゆるやかに結わえ付ける。ひび割れないよう丹念に油を引いたそれは独特の光沢をもっていた。ナイフを抜きとる。ステンレス鋼が白く輝き、真紅の瞳を映し出す。すぐにシースに納めると、携帯端末はそのままにロッカーを閉じた。鍵をしっかしかけたことを確認すると、入ってきたときと同様、足速に廊下を進んでいく。

やってきたのは離魅の自室。ノックをするやいなや、返事も待たず扉を開く。

「……おだやかじゃないわね」

ぼそぼそと、あやめの姿をみとめた離魅が言った。パソコンで作業をしていたのか、身体はディスプレイに向かい、顔だけを入り口に向けている。あやめは笑顔のまま、ナイフを見せ付けるように腰をひねる。

「ちよつとでかけるね」

「用のない人間は『学園』の境界を越えてはならない……たとえ新人類だろうと、人類だろうと。入るときも出るときも。それが規則」

「うん。だから、用事をすませに、外に、ね」

離魅は表情を変えずパソコンのディスプレイに向き直る。そして、興味なさそうに言った。

「……どこから？監視塔に伝えておくわ」

「南から」

あやめは踵を返し、部屋から出る。

「早い帰りを」

「喜ばしい夜を」

あやめはおどけたように言う、さつと扉を閉じた。

部屋にいる離魅はすぐに南側の監視塔に連絡を入れると、それまでの作業を投げうってベッドに倒れこむ。

「……あやめが……また……」

あやめがナイフを持つ。その理由は一つしかない。そこに疑問をもつ者はいない。答えはあやめの中にあるが、誰もその答えを必要としない。

殺人鬼が人を殺す道具をもつ。それは当然のようで——その実、とても歪んでいる。離魅はそう思っていた。

なぜなら、あやめには――

夜が始まる。人工の光がないこの辺りは、頼りになるのは月明かりだけだった。星々の輝きもかき消す彼女の魅力は、闇に閉ざされた地上を照らす。素晴らしい月夜。

だが、どれほど美しい景色も台無しにしてしまふ威圧感を放つ男が一人。黒いスーツに身を包み、暗黒が月明かりを呑み込むように夜に浮かび上がっていた。

「……何者だ」

男は低い声で問い、それだけで空気が凍りつく。硬質化したかのように張り詰め——それすらたやすくはぐしてしまふ気楽な声が鈴の音のように響いた。

「こんばんは」

紅い瞳の少女——あやめが姿を現した。目を細め、敵意をむき出しにする男の前に、笑う。

「もう一度問う。何者だ」

男の声。とたんに、頭上の月はその役目を強制的に下ろされる。もはや彼女が輝く幻想的な夜はなく、あるのはただ人を圧死させるほどの威圧感と、人を刺殺するほど鋭い視線。

「それはわたくしが言いたいんですけどね。どちらにせよお互い素性なんてどうでもいいじゃないですか」

「ならば問いを替えよう。おまえは敵か？」

男の問いに、あやめはやはり笑って答える。

「敵かどうかと訊かれたら……たぶん敵じゃないと思いますよ」

紅い目をした少女の声に、男はわずかに眉をひそめた。少女の目的は不明だが、少女はたしかに男の前に立ちほだかるつもりでいるようだ。にもかかわらず、男の敵意を少女は平然と受けとめ、なのに少女からは一切敵意は感じられない。少女はただそこにいるだけだった。

「ならば、なぜ俺の前に立つ」

「あなたの邪魔をするため」

少女の返答に、男は迷うことなく虚空から剣を抜いた。

（『銀檻』起動）

その剣はぼんやりと発光していた。揺らめく炎を彷彿させる、歪んだ曲線。実用性からはかけ離れた形の剣を、男は構える。

「妖精……？」

「然り」

男の姿がぶれ動き、瞬きのうちにあやめを間合いにとらえた。回避できるほど緩い攻撃ではなく、防御できるほど柔らかな斬撃ではない。あやめは思考を超えて感じ取り、左手の指を腰元の携帯端末に走らせる。

（『角に穴を穿つ者』起動。生成開始）

呼び出された妖精は手の平大の楔を具現化し、あやめを庇うように斬撃の行く手を阻む。固定も浮遊もしていない楔が自由落下を始める直前、男の剣が楔ごとあやめを斬る直前、再

びあやめは端末を操る。

（破断）

楔を中心とした直径十センチの球体表面上で、内と外が完全に分断される。それは男のもつ剣として例外ではない。あやめのもつ妖精、その能力は楔を起点とした空間断裂。妖精は、世界さえも変転する。

切っ先の縮んだ剣はあやめに触れることなく虚しく空を斬る。その隙を狙っていたあやめは、いつの間にか右手にした大振りのナイフを迷うことなく男の喉元に刺し貫き――

「ひやあつ！」

――さほど進むことなく、空中で突然あやめの右手ごと凍りついた。あやめは場違いなほどゆるい悲鳴をあげ、すぐさま右手を戻して後退、男と距離をとる。

「ふむ……こうなっても、能力は使えるのだな」

男は独白すると短くなった剣を捨て、新たに剣を手にとった。

「珍しい妖精を持っているな」

「わたしの妖精なんてどこにでもある普通程度のランクですよ」

凍った右手をさすりながら、あやめは笑う。ナイフを握ったまま凍りついたのは僥幸だ。まだ、その手は人を殺すことができる。

あやめは高速で思考を回転させる。あの剣は相手の妖精、能力は右手の感覚が示すように

凍結。そして、右手はあの剣が描いた刃の軌道に重なった瞬間凍りついた。あやめの紅は、闇夜の中でも正確に距離を見切っていた。

（剣の弾道上の運動制御、かな）

ならば、ナイフの運動も、あやめの体温による分子運動も、妖精によって『凍結』されたと見るべきだ。妖精はまさになんでもあり、あやめの妖精もこの世界秩序からすれば十分でたらめな能力だ。

男はあやめの動向を窺うようにじりじりと距離を詰める。

（『角に穴を穿つ者』生成開始）

あやめは再び楔を具現化、左手で投げナイフのように持つと大きく振りかぶり、投げナイフとは思えないオーバースローで放つ。男は高速で迫る弾丸を冷静に見据え、カーテンを引くようにゆるやかに剣で風いだ。半瞬遅れてその軌道に重なった楔は見えない壁に阻まれたように停止し、重力に従って落下する。

（んーまだよくわからないけど、とりあえず剣振らせなきゃいいかなー）

決断してからあやめの行動は早かった。

あやめの足下が爆ぜた。恐ろしく速いダッシュをかけるため、地を抉るほどの脚力で地を蹴った。間近に迫るあやめを、男が迎撃する。真紅の瞳が男を射抜く。

男が剣を振るう。だが、それでも間に合わない。男が剣を振るうよりも速く、あやめは数

メートルの距離を詰めていた。

つまるところ、武闘派にとつてはそれが全てなのだ。相手が反応するより速く、相手を殺す。戦う必要はなく、ゆえに敵対することはない。

理論も筋道も流派もない、ただ無骨にして無謀、変則的にして圧倒的な暴力が男に迫る。殺意はなく、信念をもたず、敵視もせず、あやめのナイフは男の頸部を深々と斬り裂いた。男の身体からすぐに力が抜け、血を吹き出しながら地面に倒れる。死体はもう動かない。

殺人鬼が人を殺す。それは当然のように思えて——実は、かなり歪んでいる。

なぜなら、殺人鬼に人を殺そうとする意思はない。人を殺すための殺意はなく、人を殺すほどの信念をもたず、人を殺すに至る敵意もない。殺人鬼はただ、人を殺すだけなのだ。凶器を持つなどとは考えず、人を殺したいなどとは感じず、人を殺す鬼。

あやめは笑顔のまま自分の凍った右手をじっと見つめると、やがて闇に溶けるようにして走り去った。死体を顧みることはない。彼女が人を殺すのに特別な意味はないのだから。

男の死体を隠すように雲が月を完全に隠し、死体を見つめる彼女の目をさえぎった。

『学園』に通うようになって二日目、黒那はすでに馴染んでいた。子どもというのは単純で、自分たちよりほかに抜きんでる者は簡単に受け入れる。同世代より二回以上大人びた黒

那は、すでに一目置かれるほどの地位になっていた。だからといって、黒那は特に興味を示さない。それがまた子どもたちの関心を引く。

黒那は騒がしいことは嫌いではないが、集団に囲まれることは苦手だった。だから放課後となった今は、あやめの温室の近くの森にいた。森には侵入者を察知するための仕掛けがたくさんあると聞いていたが、温室に至る途中ならばきっと平気だろう。とはいえ一旦『くろつき』でめばしい機械を探し、安全を確認した上で黒那は木に登った。太い枝に腰掛け、『学園』より小高い場所に位置するそこからグラウンドの一部をのぞむ。

なぜ私はこんなところにいるのだろうか？黒那は頭の隅で考えていた。もともと『あちら』を逃げ出したのに大した理由はない。いつか捕まって連れ戻されるとは思っていたが、追われれば逃げたくなるのが人情、ほうほうの体で逃走劇をくりひろげ、なんの縁か『学園』にやってきた。気を失ったところであやめに拾われ、こうして生徒にまでなってしまった。

そもそも、この人間もまた奇妙なものだ。わざわざ新人類を集め、素性のわからない黒那も二三日とたたず生徒として引き込んでしまう。あまりにも急すぎる展開に黒那自身混乱していたが、すでに受け入れている自分は意外と順応性が高いのかもしれない、そう黒那は自分自身を評価していた。

おかしいといえbaum一つ。しつこかった追っ手がこの『学園』に来てからばったりと途絶えてしまったことだ。最後には生死を問わず連れ戻そうと殺し屋のような物騒な連中まで

巻き込んだのに、今やその気配はない。諦めたのか、黒那一人にかまう必要もないのか。

あるいは。黒那の心に疑念が膨らみはじめる。この『学園』そのものが奴らの手の内にある箱庭で、逃げおおせたと思っている黒那は自らケージに戻ってきたのではないか？あやめも離魅もセーラも、クラスメートでさえもみな全て知って黒那を騙しているのではないか？

一度生まれた疑念は加速度的に黒那の心を満たしていき、黒那は徐々に不安になった。独りが嫌になり、あやめか離魅に会うために研究所へ行こうかと考える。

ぐあう。

すぐそばから聞こえた異常な声に反応し、黒那はすぐに飛び降りた。新人類として秀でた身体能力をもつ彼女は危なげなく着地し、頭上をにらむ。やがて木々の隙間から顔をだしたのは、ただのクラスだった。黒那を一瞥すると、すぐにどこかへ飛び立ってしまう。

「……おどかさないですよ」

自分自身に語りかけ、落ち着きを取り戻す。ネガティブな思考回路をしているから、クラスごときにここまで驚いてしまうのだ。

今日もまた、診断のために研究所へ呼ばれている。さっさと行つてさっさと済ましてしまおうと考え直し、歩き始めたとなん、人の話し声が聞こえた。

「でさー、みんなツツコンでるのにそいつだけ気付かないの！もうおかしくてさー」

黒那は再び木の枝に飛び移り、身を隠す。

（『くろつき』起動。視覚情報を同期化）

呼び出した妖精が目の前に現れる。その姿が透明になり景色に溶け込んだことを認めると、声の聞こえる方向へ飛ばす。妖精の探る風景が頭の中で映し出され、声の主である高等部とおぼしき男子生徒とその友人二人が談笑している姿を見つけた。

「まじで？なんで気付かねえの？」

「だからバカなんだってあいつさ」

「つーかまわりが教えてやれよ」

「いやなんか教えにくくてさー。誰か教えるだろうって思ってた」

「で、みんなそう思って誰も教えないんだろ？」

男子生徒らはこちらに向かっているようだった。名前も顔も知らない彼らを、しかし黒那はどうしても気になった。彼らは今ここにいる黒那の存在を知らない。

ならば、彼らは私に隠している秘密を話していてもおかしくないのではないか？

冷静な思考があり得ないと否定する。彼らはおまえのことを知らないのだ、自意識過剰の被害妄想は止せ。

だが、心に広がった疑惑が囁く。もし、そう、もしの話。

彼らが私のことを話しているのだとしたら？

（『デュエリスト』起動。運動能力五、知覚速度五に定義）

気付いたときには、黒那はもう一体の妖精を起こしていた。その能力で通常の五倍の筋力を得て、五倍速で彼らの背後に忍び寄る。同じく加速された知覚速度はその中でも通常と同じように視界を開き、彼らを肉眼で確認する。

そして、その首に思い切り手刀をたたき落とした。

中心にいた生徒の首が不快な音をたて、目を背けたくなるほど折れ曲がった。

そして、残りの二人がその悪夢を目の当たりにする前に――

「赤萩さん」

研究所内、廊下で偶然すれちがった研究員をあやめは呼びとめる。研究員のなかではまだ若い男性、白衣のポケットに手をつ込みながら、脇に書類の束をはさんだまま足早にすぎる彼を躊躇なく足止めする。

「ん？どうしたあやめ？」

気だるそうに――実際、研究という仕事はあやめの目には気だるそうにしか映らない――反応し、足をとめる赤萩。彼は黒那の診断をまかされていて、そろそろ最終結果がでるはずだとあやめはふんでいた。手にした書類が、その診断結果であろうことも。

「黒那の結果、できましたね」

それ故に、疑問ではなく確認の問いかけ。赤萩も氣にした様子なく、書類をめくり見る。

「ああ、まあな。これから報告にいくところだ」

「どこかおかしなばしょ、ありましたか？」

「ん！……まあ、厄介なことはあるな」

「ああやつぱり。神経にきちゃってますよねあれは」

「……わかるのか」驚きを隠さず、赤萩は大きく目を見開いた。

「ええまあ、なんとなく、ですけどね」

対するあやめは、たいしたことでもないように、笑顔を浮かべたままだった。

「藤堂というお前といい、新人類ってやつは勘も鋭いのか……まあいい。黒那なんだがな」

「あ、聞かせてくれるんですねー」

「ここで教えなくても勝手に調べるだろう？」

あやめは笑いながら無言を返す。それは肯定の意をあらわすサインでもあった。

「話を戻すぞ。黒那の身体だが、なんていうのかな、脳組織に損傷がみられる」

「はあ」

赤萩は続ける。「ほんの数時間でそれは拡がっていた。頭だけ、損傷を受けているんだ」

「それは……先天的な、あるいは事故のような、だれにでもありえる仕方ない病気とかですか？それとも――」

「ちがう。これは明らかに薬物によるものだ。故意に起こされた中毒症状に間違いない」
やはりそうですか、とあやめは困ったように眉をひそめ笑う。

「『首輪』ですかねー」

「おそろくな。定期的に薬を摂取しなくては脳組織が徐々に破壊されるよう仕込まれてる」
それで、症状はどうなるのですか？」

「詳しいことはまだわからないが……おそろく、一段階進行した時点で発狂する」

「発狂、ですか？」 あやめは言った。

「ああ」 赤萩は苦虫をつぶしたような顔をして言う。「頭が混乱し、感情を制御できなくなつて、周囲すべてが自分の敵と思うような強迫観念にとりつかれる。タチ悪いことに、四肢は健康そのもの、自由に動かせる状態だな」

「強迫観念……なら、その先は——」

赤萩があやめの言葉を継ぐ。「ああ、なんにも考えず、ただ周囲に暴力行為をはたらこうとする強い破壊衝動におそわれる。暴れちらす獣になる」

「なるほどー」 あやめは相変わらず気の抜けるような気楽さで返事する。「次の段階は？」

「わからん。わかりたくもないほど悲惨な薬だが……まあ予想はつく」 赤萩が言った。「まず遠心性神経からイカレて、身体のあらゆる中枢機能が衰えて……」

「死ぬんですねー」 こともなげにあやめは結論を口にした。

反射中枢、神経中枢、呼吸中枢、あらゆる身体の機能を調整する能力を削ぎおとし、最終的には死にいたらしめる。呼吸困難におちいり、あらゆる器官が弱まり、筋肉が痙攣したまま、全身を激痛にみまわれながら、死を待つことになる。なんと悪趣味な薬物か。

「助けることは？」

「無理だ。先刻もいったが、これは薬物の依存症だから。彼女は気の遠くなるほど長い間、薬漬けにされてきたようだ。その薬がなければ、数日たりとも生きられないほどに」

「解毒も？」

「時間がない。完全に解毒するには時間がたりず、時間をのばすには依存度を高める必要がある。彼女はもともと、助かる身体じゃないんだよ」

気の毒にな、と赤萩は長く息を吐く。

「じゃあ、あと一つだけいいですか？」 あやめが言う。

「なんだ？」

「そのこと、黒那本人は知ってると思いますか？」

日が落ちる。今日もまた、あやめは山を降り人知れず人を殺す。

彼らの目的はどう考えても黒那だろう。黒那を連れ戻そうとする追っ手を、あやめは無関

心に処分していた。

右手が凍傷でわずかに痛んだが、それも数日で快復する。追っ手を殺すのに支障はない。とはいえなんとか手をうちたいなーと考えながら、あやめは死体を見下ろしていた。

そこに、第三者の気配がゆらぐ。あやめは気にせず、物思いに耽っていた。

「なんであやめは……人を殺せるんですか？」

死体を眺めるあやめに、ついさつき手にかけて者を笑顔で見下ろすあやめに、第三者——あるいは中心人物——黒那は問いかける。

「それじゃあ黒那は殺せないの？」

黒那がそこにいることになんの疑問をもたないのか、黒那に笑顔をむけ、あやめが問い返す。疑問にたいする疑問。それは、直接答えるよりも直接的な答え。

「……無理ですね」

だから、直接的な解答を返す。

「嘘」あやめは一拍もおくことなく否定する。

「殺せません。私には」黒那が言う。

「嘘」あやめが言う。

「殺しません」黒那。

「嘘」あやめ。

「私は……！」

「嘘」

あやめは笑顔のまま黒那を見据えた。真紅の視線が黒那に突き刺さる。耐えかねた黒那は顔をそむけると、あやめに背を向け歩きだした。

「なんで……そんなこと言うんですか」

「わかるんだよー。わたしは。離魅はもつと」

無言でうつむく黒那に、あやめは優しく微笑む。おそらくそれは、黒那が初めて見る、あやめの本当の意味での笑顔。

「あやめは、誰でも殺せるんですか？」

「うん。わたしは本来、殺す理由は必要ないから。誰かを区別することもないんだ」

あやめが黒那に近づく。歩み寄る殺人鬼を、黒那は顔を上げて見つめた。

「私は……嫌です」黒那が言った。「赤の他人を殺すのは嫌です。友人を殺すのは嫌です」

あやめは黙って微笑み、黒那の言葉を聴いていた。

「だから、私は赤の他人に殺されるのは嫌です。友人に殺されるのは嫌です」

「じゃあ、黒那はどうしたい？」

「私が殺すのは——殺さなくてはならないなら——純粋な敵がいいです。私が殺されるなら、どうしようもなく敵対するしかない相手がいいです」

そして、黒那は黙る。あやめも何もいわず、黒那も沈黙を守る。

やがて、あやめは何もなかったかのように『学園』に向かって歩き始めた。その後ろを、黒那は重い足取りで付いていった。

離魅は足早に廊下を歩き、自室へむかう。ノックすることなく、ためらうことなく、扉を開きなかを見ると――そこには先客がいた。自室なのだからノックはいらない、ためらう必要はない。だが、そこに人がいれば、それは少しおかしな話になる。

「やつはー、離魅」

「あやめ……勝手に人の部屋に入るのは感心しない」

「あんな鍵じゃ不用心だよー」

どれほど堅牢な鍵で施錠しようと、このご時世、解除する方法などいくらでもある。問題にしているのは、鍵で施錠している意図をくみとってほしいということなのだが。

入り口で立ち尽くしてもしょうがないので、離魅は定位置であるパソコンの前に移動する。

「それで、なにか用？」

「用ってわけでもないんだけど」

あやめはベッドに寝転ぶと、仰向けのまま顎をあげ離魅を見上げた。前髪が重力にしたが

いだらしく垂れ下がる。

用がないなら勝手に入らないでよ、離魅は内心で思いながら、それを隠すことなく憤然とした態度で伝える。あやめの笑顔は変わることなく、柳に風。

「もうさー黒那限界なの」あやめが切り出した。

「……そのことね」

それについては前回の診断結果から離魅も知っていた。感覚で察知するあやめは、おそらくデータよりも正確な判断をくだしている。

すでに人としての意識を保っていることすら疑わしいほどに、黒那の脳は壊れていた。診断から一日、彼女はもう、黒那とは呼べない存在になっているかもしれないかった。

「それで？」

「わたしが殺すんだよね。ここの『失敗作』は」

「……そうね。それで？」

「あの子、人殺しちゃったよ」

「……そう」

ならば、黒那はもう『失敗作』だった。あまり穏やかではない『学園』でも、それはすでにどうしようもなく禁忌を犯したことになる。

「……いつ、殺すの？」

「明日。黒那はわたしを待っている。わたしを必要としている」

「気をつけてね……」

雖魅はただ、意味のない言葉をかけるしかなかった。

人は死ぬ。当たり前の事実。だが、ほぼ全人類がその事実を知っていても、死の瞬間を目の当たりにした人間は少ない。自分で死をひきおこした人間はさらに少なく、自分の死を体験した者は皆無である。

知識と経験はまったくちがう。知っていることと実際に体験することは、その真実の度合いが異なる。

今、他人の死を経験し、自らもまた死に瀕する黒那は、おそらくだれよりも死を深く理解していた。

「もう……限界、かな」

自我が薄れていることを黒那は気付いていた。

「最期に、もう一度――」

――彼女に……。

そして『黒那』は気を失った。

夕陽が沈む。夜の帳が降りてくる。

森の中、黒那は暗くなる前からさまよっていた。山をおりて『学園』を抜けだすわけではなく、山を登って『学園』に戻るわけでもなく、ただ森を放浪していた。そもそも、いつ森にはいったのかもわからなかった。

こうしていれば、彼女は必ずやってくる。期待に似た確信、そう考えるのは何故か。まともにも働かなくなった頭で考えた結果の行動、摩耗し消費し矮小ともうどこへいつてしまったかもわからない「自分」が考えた末の、黒那の行動。研究所にも温室にも行こうと思わなかった。彼女との約束は、もはや果たすべきでないと思っていた。相応しいのはやはり森なのだ。

そういえば、と黒那の心が一方にまともって向かいだす。彼女に初めて会ったのも森の中だった。ほんの数日前のことだ。始まりの場所が終わりとなる、そんな詩的で悲劇的な思考は持ち合わせてはいなかった。ただ、人を殺すならば森の中のが都合いいと思った。木を隠す以外にも、森という広く閉鎖的な空間は隠すということにうってつけたかった。

そして、足をとめる。希薄となった「黒那」がふるえた。それは、永劫かなわなとおもっていた再会がなかった歓喜によるものか、死神を前に命を乞う余裕すら奪い取る恐怖によるものか。

「……やっぱり、来てくれましたね」

見つめる先に、二つの不吉の星が輝いていた。
笑顔の殺人鬼が、疲れきった獣を見つけた。

研究所の一室。離魅は椅子にもたれかかり天井を見上げていた。

考えていたのは、あやめのこと。

彼女は殺人鬼だ。彼女は、どこまでも、鬼に堕ちていた。

そして、黒那のことも考える。

彼女は獣だ。彼女は、どうしようもなく、獣になろうとしていた。

鬼と獣。欠落した感情と欠損した思考。両者の違いはなんだろうか。両者の結末はなぜ違うのか。

そして、どちらがより「人」に近いのだろうか。

離魅にはわからない。

空の見えない深い森、どす黒い墨に塗り潰された視界、黒那はあやめの姿を見つけた。
初めて会ったときと変わらぬ笑顔、『学園』を案内している間と変わらぬ笑顔。離魅と楽しそうに談笑しているときと変わらぬ、笑顔。彼女はなにも言わず、ただ笑っている。

「もう、だめなんです」

黒那が口をひらく。自分でもなにを言っているのか、ぼんやりとした頭ではわからない。
意識が朦朧としてるところまで、最初と同じ。

「だからせめて、あやめに殺されたいと思います」

あやめはなにも言わない。殺人鬼に言葉はいらない。『死』とはそういうものだ。ただ静かに、そこにあればいい。

「あやめなら、罪悪感もなく、私を殺してくれます。私も、なんの心残りなく、殺されます」

いつか彼女に訊いたことがある。たとえ友人でも、必要あらば殺すのかと。また、そのとき黒那は確かに言っていた。友人を殺すのも友人に殺されるのも嫌だと。殺されるときは、純粋な敵に殺されたい、と。

「だから最後は……あやめの『敵』にならせてください」

そして黒那は「人」を捨てた。

獣が低いなり声をだす。黒那の口から敵意がもれる。自動的に頭のなかでスイッチをたたき、『妖精』を呼び出した。

（『デュエリスト』起動。運動能力三〇、知覚速度三〇に定義）

対するあやめは右手でナイフを抜く。威圧するでもなく、笑顔のまま、ただ静かに黒那を睨む。

〔「角に穴を穿つ者」起動〕

あやめの左手に楔が現れた。ほぼ同時に、黒那は全身にみなぎった緊張を解きはなち、跳びだす。人を超えた超高速、人ならば追うことすらままならない速度で一直線にあやめに向かい、その右腕を振り上げる。

あやめは驚いたようにわずかに目を見開き、ナイフでもって黒那を迎え撃つ。左手の楔を離し、ファイティングナイフを両手でもち、獣の一撃を受けとめる。

「……………ッ!!!」

息をもらしたのはあやめ。獣の力は、鬼の力をわずかながら上回った。腕にかかる衝撃を殺すため、あやめは重心を後ろにずらす。黒那はさらに踏みこみ、下がるあやめを追撃する。

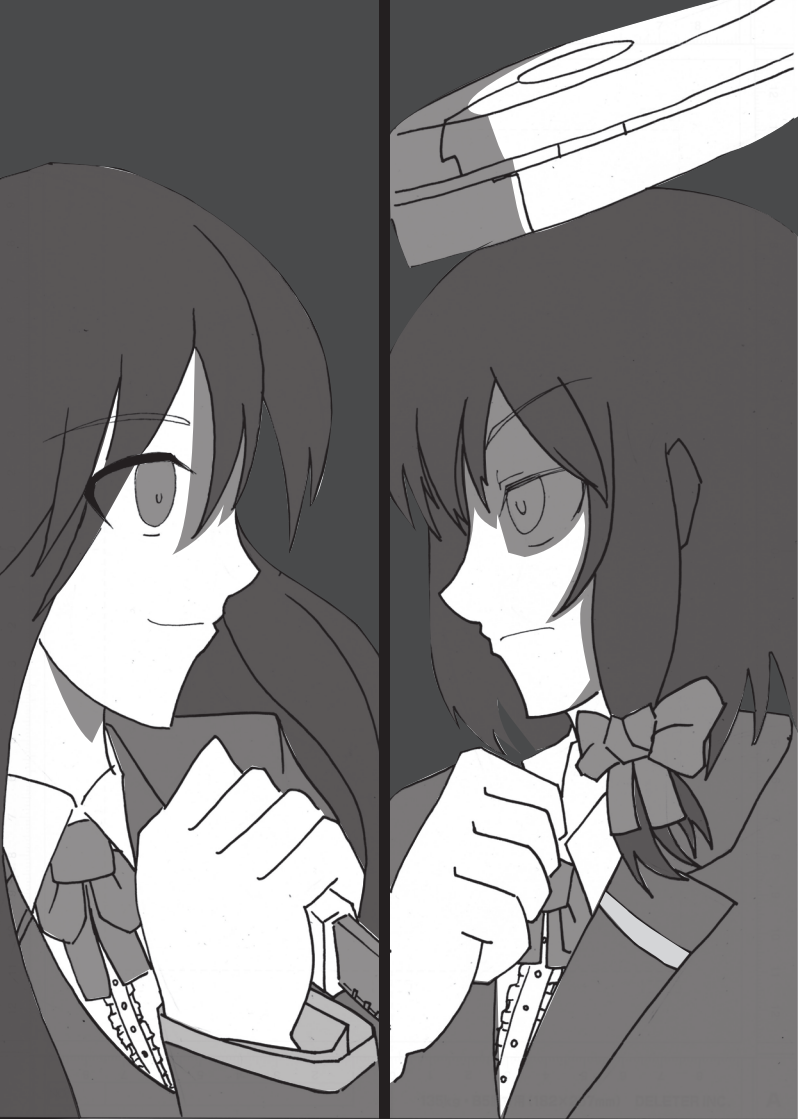
あやめは右足を下げ、体勢を低く構える。紅い瞳が獣を見上げる。黒那は覆いかぶさるように躍りかかり、渾身の力をこめて右腕を振り下ろす。

力で勝らぬ殺人鬼は、速度をもって獣を凌駕した。

あやめは地を蹴り、黒那のわきを風のように跳び抜けた。黒那は身をひねりあやめに向けて腕を突き出す。だが、あやめの身体に触れることなく手首に激しい痛みがはしる。すれ違いざまに、ナイフが鋭く閃いていた。

お互い距離をとり、再び対峙。

「ほんととは……ちょっとだけ、期待していたんです」



黒那がつぶやく。彼女の前では「黒那」を捨てるときめていたのに。ただの獣に成り下がると約束したのに。彼女の意志に反して彼女の口から言葉がもれる。

「ここに来たらなにか変わるんじゃないかって。ここに来たら私は生きられるんじゃないかって」

これでは自分は、ただの哀れな負け犬ではないか。言葉を交わす必要はなく、なにも語る時をおかず、ただ静謐な対峙において殺し合う敵なのに。それはまるで——ただの女の子であった。

「あやめに声をかけられたとき、私は本気でそう思いました」

口から言葉が溢れだしながら、黒那は再び駆けだす。あやめは楔を投げる。およそ投げナイフとは思えないほど大振りのオーバースロー、その動作が見えていながら、高速で放たれた楔を黒那はかわしきれない。かろうじて身をひねったところで右腕に突き刺さる。かまわず黒那は左手を突き出し、あやめは反発する磁石のように後ろに弾け跳ぶ。距離をあげたままお互い静止、黒那のつぶやきは止まらない。

「結局なにも変わらなくて……私は死ぬみたいですけどね」

「黒那は……」ここにきて初めて、あやめは口を開いた。それこそが、黒那はあやめの「敵」になれなかった証だった。「……死ぬのが、嫌？」

「嫌です。とても怖くて……とても、寂しい」

「わたしや黒那が殺した人たちも、きっと、みんな同じだったよ」

そして、両者は駆けだした。

あやめはナイフを黒那の首筋めがけて振りぬいた。

黒那は正面から爆発的な勢いで迫り、貫くように左腕を刺し通した。

あやめ、黒那の腕が自身の身体に触れるより速くそのナイフが首を捉える。それは即死には届かないが、あきらかな致命傷だった。

黒那、焼けるような頸部の痛みを無視し、なおも正面からあやめの身体に触れようと手をのばす。

あやめ、振りぬいたナイフをかえし、再び黒那の喉もとをねらい突き通す。黒那の身体をいなすようにしてかわし、貫通した切っ先が夜の外気に黒那の首を縫いとめる。

黒那、伸ばした腕から一切の信号が途絶えたことを知り、力なく倒れこむ。前のめりになりながら、それでもその瞳はあやめをとらえたまま逃がさない。

——殺した感触を感じながら、それでも笑みは変わらない。

——殺された感触を感じながら、ただ一言、声にならないつぶやきをこぼし倒れ伏す。唇はわずかに歪み、目は静かに閉じていた。

「――」
あやめは黒那の死体を見下ろし、なにごとかを話そうとした。だが、それは喉を震わせる前にあやめの心から消え去り、なにも口にすることなくあやめはたたずむ。やがて、ナイフを抜きとるとたいして血を拭わずシースにしまい、踵を返した。

黒那の死を、ただ森だけが包んでいた。

「結局のところ」雛魅はパソコンの画面から目をそらさず、あやめに向けて言う。「あやめはこうなることわかってて、あの子を連れてきたの?」

「こうなること? あの子?」

「殺すことをわかってて。黒那を」

「ああね」

からからと笑いながら、あやめは答えた。

「そりゃあ最初からちよつと変わった子とは思ってたけど、まさか死ぬとは思ってなかったよー」

「どうだか」

黒那の死から夜が明けた翌日。あやめも雛魅も変わらず日常を送っていた。黒那がいなく

なろうと、それで他人の生活が変化するわけがない。

「それで、前は黒那がどこにいたのかわかったの?」

逆に、あやめが問い掛ける。

「だいたい。裏はとれてないけど目処はたってる。でも教えない」

「雛魅がわたしに隠しごとなんて、珍しいねー」

あやめは笑いながら、雛魅の頭を撫でていた。撫でられる優しい感触に身をゆだねながら、雛魅は無視を決め込んでディスプレイに集中する。

たしかに、あやめに隠しごとなんて滅多にあることではない。そもそも、彼女に隠しごとをしても無意味な気がする。彼女はどこまでも透明で、人の心を見透かすなんて造作もない。その紅い瞳になが映っているのか知らないけど、と雛魅は思う、彼女はなんでも知っている、それでも笑い続けるのだ。

「あやめは、これからどうするの?」

「どうって言われても……べつにいつも通りだよ。勉強して、お花を育てて、またお仕事をすると思う」「そう」

雛魅は立ち上がると、窓の近くまで歩み寄った。空は厚い雲に覆われて薄暗い。雛魅の心もどこか寂然としなかったが、なにを考えればいいのか、やはりわからなかった。

黒那という少女がいた。ほんの数日間だけとはいえ、友人となった彼女を雛魅は忘れられなかった。そして改めて気付く。自分はしよせん孤独なのだと。

ならば、あやめはどうなのだろう？ 彼女は孤独なのだろうか？ 雛魅はすぐに答えを出した。イエスであり、ノーである。彼女はもはや人間という尺度では計れないのだ。考える輩が人間ならば、あやめは生成流転で大地を飲み込む宇宙なのだ。そんな彼女に、孤独なんて言葉があてはまるわけではない。それほど彼女は強いのだ。

「まだまだ、忙しくなりそうね」ディスプレイの前に戻り、雛魅は小さくつぶやいた。

「そりやね。世界は広いから、まだまだいろんな出来事が起こるんだよー」あやめは笑う。

「ここは『学園』、わたしたちは『新人類』、世界には『妖精』が飛び回る——なにが起きて
も不思議じゃないでしょ？」

END